

# 平成 18 年度最終報告書

被助成者 : 在日コリアン青年連合(KEY)

コード番号 : 06 - A - 075

申請事業名 : 北東アジア平和共同体建設に向けた日中韓エンパワーメント&ネットワーク  
プログラム

## ①研究／活動の目的

この数年で、東アジア共同体実現に向けた外交的・政治的な努力が行われており、2005年は東アジアサミットまで開催されるに至った。一方で、東アジア共同体実現に向けた大きな障害は、東アジアの中でも、特に東北アジア地域諸国家間の対立にあると考えられる。とりわけ、日本と北朝鮮の関係正常化と、靖国問題をめぐり対立が激化している韓国・中国と日本の対話関係の再開は非常に重要な課題である。このような東北アジアの国家間対立は、東北アジア各国の市民社会での対立にもつながらざるを得ない。そして、このような国家間の対立を止揚するためにも、市民社会の努力が重要なのである。

私たちが在日コリアン青年連合(KEY)は、日本と朝鮮半島の狭間に生きる在日コリアンこそが、日本と朝鮮半島の架け橋、ひいては東北アジアの架け橋になれるという思いをもち、さまざまな活動を行ってきた。具体的には、日韓の和解と協力関係の構築を目指して、1997年から日本人と在日コリアンと韓国人の交流事業を行ってきた。そして、2004年からは、日朝関係の克服に向けて、日本のNGOと在日コリアンのNGOと韓国のNGOのネットワークを強化するために活動を行ってきた。(2004年度庭野平和財団活動助成事業)

この二つの活動は今後も継続して行っていくうえでの私たちの事業の形としての雛型がすでに出来上がっている。その上で、東北アジアの平和共同体を実現するためには、中国と日本及び韓国の協力関係の深化が重要であることは言うまでもない。現在のように冷え切っている日中韓関係を克服し、日中韓の相互理解と協力関係を促進していくために、私たちは、これからの未来を担う青年層に焦点を当てて事業を行いたい。具体的には、東北アジア平和共同体の建設を日中韓の青年が、ともに協力して担っていけるようにするために、日韓中の青年をエンパワーしネットワークを強化する事業を行いたい。歴史・平和(核問題)などといった、東北アジアの平和を考える上で避けて通ることのできないテーマについて、日韓中の青年が互いの違いを認め合いつつも、共通の価値観を育める出会いと交流と協力ためのプログラムを開催したい。

具体的には、①「東北アジア青年縦断紀行～アジアのもうひとつの未来」と題し、日本(東京)、韓国(ソウル・大邱・陝川)、中国(北京)を訪問し、歴史と平和をキーワードにした10日間のスタディーツアーを企画する。日本人と在日コリアンと韓国人と中国人の若者が10日間行動をともにし、友情を温めながら、東北アジアの平和に関する議論を行っていく。

②日韓中のNGO団体の出会いと交流の機会を拡大していくことを考えている。

## ②研究／活動の内容と方法

### 1. 東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来～の開催

以上の目的の下、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」を2006年12月11日(月)～2006年12月20日(水)の日程で開催した。日本での行事は、12月11日(月)から12月14日(木)までの日程で開催し、東京を訪問した。12月11日(月)の18時からオリンピックセンターで開幕式を行った。開幕記念講演として、「日中韓平和共同体をどのように作るのか」というテーマで、雑誌世界編集長の岡本厚氏から講演を受けた。翌12日(火)は歴史をテーマに活動を行った。午前中は、平和遺族会全国連合会代表の西川重則氏の案内を受け、靖国神社フィールドワークを行い、靖国神社併設の博物館である遊就館を訪問した。同日午後からは、子どもと教科書全国ネット21の事務局長である俵義文氏から「日中韓歴史対話の必要性」についての講演を受け、夕方は参加者間の討論会を行った。翌13日(水)は、平和テーマに活動を行った。具体的な主題としては「在日米軍問題」を掲げ、横田基地の現地フィールドワークを行い、福生市市議会議員の遠藤洋一氏から講演を受けた。

韓国での行事は12月14日(木)から12月17日(日)までの日程で開催した。韓国では、ソウル・大邱・陝川を訪問した。12月14日(木)は東京からソウルに移動し、夕刻からソウルで、「青年が作る東北アジア平和共同体のビジョン」をテーマにシンポジウムを行った。15日(木)は午前中にソウル文化ツアーを行った後、韓国政府機関である、東北アジア時代委員会の担当秘書官であるペ・ギチャン氏と昼食をとりながら交流をした。午後からソウルの西大門刑務所歴史記念館をフィールドワークした。夕刻に大邱に移動し、16日(金)は、午前中大邱で日本軍「慰安婦」のおばあさんからのお話を伺った。午後には、陝川に移動し、日本の植民地政策の犠牲者である、広島で被爆した朝鮮人の方が生活をしている韓国原爆被害者福祉会館を訪問し、朝鮮人被爆者との交流を行った。

中国での行事は12月17日(日)から12月20日(水)までの日程で開催した。中国では北京を訪問した。中国ではテーマを二点定めた。一つ目は歴史の問題である。日本による侵略戦争の歴史が中国ではどのように描かれているのかを知るために、盧溝橋と抗日戦争記念館を訪問した。二点目は経済の問題である。北京オリンピックを前に急成長する中国経済を実感するために、北京現代自動車を訪問し、工場見学を行った。また、北京現代自動車の広報担当者からの講演を聞き、東北アジアにおける経済共同体の可能性について考えた。また、北京に在住する韓国人から現地で行っている様々な活動の報告を受けた。

参加者は延べ参加者が50人程度。日本行事の延べ参加者が20人、韓国行事の延べ参加者が35人、中国行事の延べ参加者が10人。日中韓フル日程参加者が6人であった。参加者の内訳としては、延べ参加者の大多数が在日コリアンの参加者と韓国人参加者であっ

た。日本人参加者は2名(日本青年団協議会(日青協)所属)。中国人参加者は1名(在日中国朝鮮族/日本に留学中の方で、国籍は中国、民族は朝鮮)であった。

詳しい日程表は以下の通りである。

日付	時間	内容
12月11日(月)	17時～	夕食 オリンピックセンター「カフェテリアふじ」(センター棟2F)
	18時～	開幕式 場所：オリンピックセンター センター棟403号 内容：代表挨拶・行事日程説明
	18時30分～	開幕式記念公開講演会 場所：オリンピックセンター センター棟403号 演題：「日中韓平和共同体をどのように作るのか？」 講師：岡本厚氏(雑誌「世界」編集長)
	21時～	参加者交流会
12月12日(火)	7時～	朝食 オリンピックセンター「カフェテリアふじ」(センター棟2F)
	8時～	オリンピックセンターを出発
	9時～	靖国神社フィールドワーク 案内：西川重則氏(平和遺族会全国連絡会代表)
	11時30分～	靖国神社フィールドワーク整理の場 場所：靖国神社内食堂 進行：講師：西川重則氏(平和遺族会全国連絡会代表)
	12時45分～	靖国神社を出発
	14時～	講演会 場所：オリンピックセンター センター棟502号 演題：歴史認識問題をめぐる現状と日中韓歴史対話の必要性 講師：依義文氏(子どもと教科書全国ネット21事務局長)
	17時～	休憩
	18時～	夕食 オリンピックセンター「カフェテリアふじ」(センター棟2F)
	19時～	討論会「戦争をどのように記憶するのか？」 問題提起：在日コリアンの視点から 康利行氏(KEY) 韓国の視点から
	22時～	交流会
日本	7時～	朝食 オリンピックセンター「カフェテリアふじ」(センター棟2F)
	8時30分～	オリンピックセンターを出発

日本	12月13日(水)	10時30分～	横田基地フィールドワーク 案内：遠藤洋一氏(福生市市議会議員)	
		12時～	昼食(松林会館にてお弁当)	
		13時～	講演会 場所：松林会館 演題：「横田基地から見た在日米軍及び韓国」 講師：遠藤洋一氏(福生市市議会議員)	
		15時～	新宿に向けて移動	
		17時～	観光	
	韓国	12月14日(木)	4時30分	起床
			5時20分	オリンピックセンターを出発
			6時7分	新宿発 成田エクスプレス1号に乗車
			7時29分	成田空港到着
			9時20分	韓国側：大韓航空(KE)706便で出発
9時25分		日本・在日側：アジアナ航空(OZ)107便で出発		
12時		韓国側：仁川空港到着		
12時5分		日本・在日側：仁川空港到着		
15時～18時		自由時間		
18時		夕食(ソウルユースホテル)		
19時	日中韓共同シンポジウム 「日中韓青年が作る東北アジア平和共同体のビジョン」 あいさつ チョン・ジュノ(KYC共同代表 歓迎辞) 外部挨拶 キム・イクソク(民和協青年委員会共同委員長) 日本行事の映像上映  基調発題：イ・ジョンム氏 (同胞助け合い運動本部平和分かち合いセンター所長) 発表1：韓国～鄭補然氏(KYC共同代表) 発表2：日本～岡下進一氏(日本青年団協議会会長) 発表3：中国～呉茂松氏(慶應義塾大学大学院博士後期課程) 全体討論			
21時	交流会			
12月15日(金)	7時30分～	朝食		
	9時	ソウルユースホテル出発(国会へ移動)		
	10時	ソウル文化ツアー(清溪側・東大門平和市場)		
	12時30分	昼食(ペ・ギチャン東北アジア時代委員会担当秘書官と共に)		
	15時	西大門刑務所フィールドワーク 案内：チャン・テジン氏(ソウル KYC 平和道案内)		

韓国		18時	夕食	
		19時	西大門刑務所フィールドワーク感想発表会 場所：KYC 教育室 問題提起：「戦争と歴史 記憶の問題」	
		21時	ソウル駅に向けて出発	
		22時	ソウル駅出発(KTX で移動)	
		24時	大邱到着、宿所へ移動、就寝	
	12月16日(土)		8時	朝食
			9時	大邱挺身隊市民の会訪問 元「慰安婦」ハルモニとの対話の時間(1時間) 講演：「過去史問題に対する真実と和解の方向～慰安婦問題を 中心に」
			11時30分	移動(陝川に向けて) バスの中で昼食
			13時30分	陝川 原爆被害者福祉会館訪問 ①朝鮮人原爆被害者慰霊祭 ②被爆者証言(各チーム別で進行)+簡単な文化交流 ③韓国原爆被害者協会陝川支部長との懇談：韓国原爆被害者 の理解
			16時30分	観光(映画「ブラザーフット」セット)
			17時30分	移動(大邱に向けて)
			19時	意見交流会
		21時	交流会(大邱 KYC の会員と共に)	
	12月17日(日)		6時	大邱出発(仁川空港に向けて)
			11時	仁川空港到着/出国手続き/昼食
			13時5分	韓国側：中国国際航空 124 便で出発
			13時40分	日本側：アジアナ航空 333 便で出発
		14時5分	韓国側：北京首都国際空港到着	
		14時35分	日本側：北京首都国際空港到着	
		16時	北京市内宿所到着(休憩&自由時間)	
		19時	北京の NGO 活動家との出会い	
12月18日(月)		8時	朝食	
		9時	盧溝橋フィールドワーク	
		11時	昼食	
		12時	万里の長城観光	
		19時	「日中韓歴史対話」講演会	
	8時	朝食		
	9時	北京現代自動車工場訪問		

中 国	12月19日(火)		工場見学 世界経済の大移動「東北アジア経済共同体の現況と展望」
		14時	抗日戦争記念館訪問
		18時	天安門広場など観光
		20時	閉幕式&交流会
12月20日(水)	9時	宿所出発	
	10時	日本側：北京首都国際空港到着 韓国側：観光	
	12時20分	日本側：アジアナ航空 332 便で仁川に向けて出発 15時 仁川空港到着(トランジット) 17時10分 アシアナ航空 106 便 →成田空港(19時30分着) 18時30分 アシアナ航空 118 便 →関西空港(20時10分着)	
	18時55分	韓国側：中国国際航空 137 便で仁川に向けて出発 →仁川空港(21時25分)	

## 2. ネットワーク形成に向けた行事開催後の継続措置について～日中韓の NGO の出会いと交流機会の拡大

行事開催後、今回の行事を共に主催した KYC(韓国青年連合会)の中央本部職員の日本研修(2007年1月～2007年4月まで)を行った。その際、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」に2名を参加させた日本青年団協議会(日青協)を在日コリアン側主催団体 KEY 及び韓国側主催団体 KYC の代表者が訪問し、日中韓ネットワークの拡大に向けて意見を交換した。また、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」プログラムに参加した在日中国朝鮮族メンバーとの KEY、KYC 代表者との交流会を行い、存在自体が日中韓朝をまたいでいる在日中国朝鮮族の経験から、日中韓 NGO をネットワークキングする上での困難点や可能性などについて学ぶことができた。また、中国の各団体や在日中国朝鮮族とのネットワークの作り方についてアドバイスを受けた。

そして、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」の後続事業として 2007 年 8 月以降に開催することとなっている行事についての打ち合わせも行ってきた。2007 年 8 月に後続行事を開催した。

### ③研究／活動の実施経過

2006 年 8 月初旬の開催に向けて準備を行ってきた。2006 年 4 月までには基本企画案を確定し、2006 年 6 月から参加者募集を行った。しかしながら、参加者募集が思い通りに行かず、また財源確保も十分ではなく、行事開催に向けた混乱が生じ始めた。結果、行事の開催を 2006 年 12 月に延期することを 2006 年 7 月に決定した。その後、「東北アジア

横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」への参加を促すために、「日本青年団協議会(日青協)」とコンタクトを取りはじめた。2006年8月上旬に、日青協が開催した「広島平和集会」に KYC 及び KEY 代表団が参加し、交流を持つと共に、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」行事への参加を促した。2006年10月には日青協から、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」の韓国プログラム参加の意思が伝達された。

一方、中国側との渉外は、①中華全国青年連合会への連絡と参加の勧誘、②中国に滞在する韓国 NGO 関係者のルートを通じた勧誘、③日本に住む在日中国朝鮮族への勧誘を行った。①への交渉は KYC ルートで行ったが、諸般の事情から行事を共にすることが出来なかった。②への交渉も KYC ルートで行った。しかし、このルートでも中国人参加者の参加を実現できなかった。そして、③のルートで KEY が参加者を発掘した。

2006年10月からは日本・韓国・中国で行う行事の実務準備(講師渉外、資料集作成など)を開始した。日本行事の実務は KEY が担い、韓国行事及び中国行事の実務は KYC が担った。

そして、2006年12月11日から「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」を開催した。

行事終了後、2007年1月6日から8日まで、KEY と KYC の会議を開催し(神戸)、事業の評価作業を行った。2007年2月19日には KEY と KYC の代表者が、日青協を訪問し、12月開催の行事への協力の謝礼を行うと共に、日中韓ネットワークの拡大に向けて意見を交換した。2007年3月15日には、「東北アジア横断青年紀行～アジアのもう一つの未来」プログラムに参加した在日中国朝鮮族メンバーとの KEY、KYC 代表者との交流会を行い、存在自体が日中韓朝をまたいでいる在日中国朝鮮族の経験から、日中韓 NGO をネットワークキングする上での困難点や可能性などについて学ぶことができた。また、中国の各団体や在日中国朝鮮族とのネットワークの作り方についてアドバイスを受けた。

2007年4月からは、2007年度の日中韓 NGO 交流事業についての意見交換を行った。そして、2007年度以降の日中韓交流事業の進め方についてのイメージを共有した。

#### ④研究／活動の成果

第1点目の成果は、この行事を通じて、日本の代表的な青年団体である日青協と韓国の代表的な青年団体である KYC、そして日本と朝鮮半島の狭間で生きる在日コリアンの青年団体である KEY が互いに対する信頼関係を深め、2007年度以降に共同事業を模索できる担保を築いた点である(2007年8月に後続事業を開催した)。日韓中の青年が互いの違いを認め合いつつも、共通の価値観を育める出会いと交流と協力を進めていくという共通の目標について、日本と韓国と在日コリアンの青年団体が合意した点は大きい。

第2点目の成果は、漢族の中国人との交流は実現できなかったものの、日本に住む在日中国朝鮮族という日中韓朝の狭間で生きる方と行事を共に進め、この行事の趣旨に対する理解を得た点である。日本と朝鮮半島の関係を考える上で、在日コリアンが架け橋の役割を果たす可能性があるように、日中韓朝の関係を考える上で、在日中国朝鮮族という存在は、その架け橋の役割を果たす可能性がある。統計上は明確ではないが、中国朝鮮族の日

本への流入(短期滞在も含めて)が増えているという指摘を度々耳にする。東北アジアの未来を考える上で、中国朝鮮族の存在はキーパーソンになるであろう。

第3点目の成果は、日中韓の若者の交流事業を進めていく際、大切にすべき価値観について、本行事に参加した日青協、KYC、KEYの間で概ねの合意を見た点である。具体的に言うと、歴史を踏まえつつも、今後、戦争のない平和な東北アジアをどのように作り上げていくのかという問題意識についての合意を見た。今後、中国青年とこの問題意識を共有していくことが重要になるであろう。

第4点目の成果は、日中韓の交流行事を行う上で、雛形となる行事のスタイルを本行事を通じて確立した点である。

## ⑤今後の課題

今後の課題の第一点目は、中国人、特に漢族の青年との交流を具体化することである。今回の行事を開催する際、中国側とは①中華全国青年連合会への連絡と参加の勧誘、②中国に滞在する韓国 NGO 関係者のルートを通じた勧誘を通じて、その参加を実現する予定であった。①のルートでの勧誘は、中華全国青年連合会自体が非常に大きな組織であるが故に生じる渉外の困難さがあった。このルートで渉外を進めていく際には、中華全国青年連合会との地道な信頼関係を深めていくことが非常に重要であることを学んだ。②のルートでの勧誘は、二つの困難点があった。一つは時期設定の問題で、再設定した時期が中国の大学生の冬休み時期に重なり、北京に学生が少ないという問題点が一点あった。そして、その問題よりも非常に大きな問題が中国の参加を誘導する上での参加費の捻出の問題である。経費を参加者分担にして経費を算出にするには、物価の違いがあり、中国の参加者にとって非常に高い参加費となり事実上参加が困難になる。しかし一方で、中国人参加者の参加費を捻出するほどのファンドレージングを今回は主催者側が行えなかった。安定的に行事を開催するためのファンドレージングをいかに成し遂げるのかは非常に大きな課題である。

第二点目に、日本側の青年の行事への関与の度合いを高めていくことである。今回の行事は、KEYとKYCとの共催で進められた。そして、その行事の一部(韓国行事)に、日青協から代表団が参加した形であり、行事趣旨の確認、企画、予算の確認、財源確保などはKEYとKYCが役割を担った。今後は、日本人青年団体と、在日コリアン青年団体、そして韓国の青年団体が真の意味で行事を共催できるように準備を進めていかなければならない。そのためには、三者の団体間での社会分析や事業趣旨の確認を綿密に行わなければならない。三者の団体間の対話の量と質を高めていかなければならない。